

納骨堂における建築計画と設計意図の関係性

—平面図および断面図から見る空間分析—

A study on the Relationship between the Project of architecture and the Architectural intention
Spatial Analysis by Plan and Section○鄭芝銀¹, 山中新太郎²*Jieun Jeong¹, Shintaro Yamanaka²

1章 序論

1-1 研究背景と目的

日本は火葬率が99.4%である世界の火葬国である。一方で、埋葬方法において主流とされるのは霊園や墓地であり、納骨堂は人々に広く認識されていない現状がある。少子高齢化により出生率は減少し、死亡率が増加することで墓不足が問題となり、今後納骨堂の需要が増えることが予想される。

本研究では、納骨堂が人々の生活の中でどうあるべきかを考え、納骨堂の配置・空間分析を行い納骨堂を計画する際に考慮すべき箇所を明らかにすることを目的とする。

1-2 研究対象と方法

「新建築」¹⁾で1999年から2016年までの間に納骨堂として記載された事例7つを対象に配置図から配置計画と動線計画の分析を行う。また、平面図で平面計画と動線、断面図で断面計画の分析を行い、それぞれの納骨堂についてもどんな計画がされているのかを図面と写真から考察をする。

1-3 既往研究と本研究の位置付け

山田らの研究²⁾では評価の高い納骨堂の設計者の意識をデザインモチーフから考察し、横田らの研究³⁾では二つの納骨堂の比較と納骨堂の収蔵遺骨数の変化をみて、納骨堂を選ぶ際の条件について考察している。また、武田らの研究⁴⁾では集合墓の形態と価格についてまとめ、考察している。本研究では納骨堂の意匠計画と納骨壇計画を分析し、既存の納骨堂から得られた知見や問題点を明示することを目的とする。

2章 納骨堂とは

2-1 納骨堂の空間要素

納骨堂施設の機能を大きく三つに区別してみると、エントランスとサービス空間などの供用部門、参拝者が直接に利用して故人を祈り祀る参拝部門、施設を管理する管理部門に分けられる。

2-2 用語定義

納骨堂は火葬後遺骨が安置される空間のことを言い、各室には納骨壇が縦横に配列されているのが一般的である。西洋など外国では納骨堂を利用する習慣が長く、様々な形態で発展してきた。特に納骨公園を造成し、壁に安置する公園式と景観式が目まされている。

①納骨壇：骨壺が縦横で配列されている遺骨保管施設を言う。納骨堂の基準単位である。

②骨壺：火葬された後、遺骨を入れる容器のことをいう。

③参拝室：参拝者が別の祭壇施設があるところで祭礼が可能なところで利用者の集中に備えて建物の様々な所に設置される。大規模の納骨堂や、機械式の納骨壇を装備されている場合が多い。

④永代供養墓：墓参りできない人に代わって、あるいは墓参りしてくれる人がいない場合に、寺が決められている年数の間は管理・供養を行ってもらえる墓のことを言う。

⑤グリーフケア：愛する人との死別の悲嘆により、精神状態の変化や無気力になったり、死を受け入れなく、狂乱してしまうことをグリーフと言い、その不安定な精神を慰める行為をグリーフケアと言う。

3章 納骨堂の配置分析

表1 納骨堂の種類と配置計画

名称	立地の類型	配置計画	掲載誌
真宗高田派本山 専修寺納骨堂	住宅地型	・境内北西角位置 ・回遊式庭園周辺 ・緑深く静かな	新建築1999.02
浄土宗麟鳳山九品寺 山門・納骨堂	住宅地型	・傾斜地に位置 ・納骨堂が山門と計画 ・入口に池を配置	新建築2000.11
鎌倉の納骨堂	郊外型	・山に囲まれている ・墓地が手前にある	新建築2006.10
長楽寺納骨堂	郊外型	・都心と離れ静かな所 ・本堂に隠れているような配置	新建築 2010.08
竹林寺納骨堂	郊外型	・西境内に位置 ・山の頂きにある ・住宅地と離れ静かな所	新建築 2013.07
新宿瑠璃光院 白蓮華堂	都心型	・中高層ビルの周辺 ・水庭で外と内の空間を分離	新建築 2014.09
明園寺納骨堂清浄殿 無量光	郊外型	・本堂の隣に位置 ・本堂に近いスケールを持つ	新建築 2014.10

納骨堂を立地によって「都心型」、「住宅地型」、「郊外型」三つに分けてある。都心型や住宅地型の納骨堂では敷地の内外で明確な区分がされている一

方、郊外型では区分されていない特徴がある。また、動線計画には鎌倉の納骨堂と白蓮華堂を除いて、敷地の境内に配置される傾向があったが、それは納骨堂に向かう際に本堂や仏教と関係がある自然のものをういたアプローチを計画したからと考えられる。また、鎌倉の納骨堂はカトリックによる納骨堂であり、建物の正面に十字架を表現しているが、他の仏教による納骨堂では仏教のモチーフを建築計画に取り入れただけで、立面的に仏教らしさは隠されている。

4章 納骨堂の空間分析

4-1 納骨堂の平面・断面分析

表2 納骨堂の類型と空間計画

名称	納骨室の配置類型	平面計画	断面計画
真宗高田派本山 専修寺納骨堂	分散型	・真ん中に吹抜けを置いて自然採光を導入	・床の高さを外の木とレベルを合わせ内部、外部が一体化 ・階段の天井高さが違う
浄土宗麟鳳山 九品寺 山門・納骨堂	分散型	・予備室・会議室が配置されている	・池を内部まで引きいれている ・段差を利用して、駐車場、駐輪場あり
鎌倉の納骨堂	集中型	・狭い敷地に位置 ・シンプルな平面計画 ・中央に祭壇が立てて、チャペルができる	・高さの変化の内一つの室のような建築 ・真ん中を空けてアクティビティが広がる
長楽寺納骨堂	集中型	・巨大なケヤキがある ・礼拝室と納骨室の境が不明	・納骨堂を入る前後に天井高さの変化がある
竹林寺納骨堂	分散型	・細長い ・休める空間はあるが違うアクティビティが行う空間はない ・礼拝施設が無い	・通路と納骨室の天井高さが違う
新宿瑠璃光院白 蓮華堂	分散型	・遺骨の収蔵が集中されているが参拝室が分けられている ・お寺と一体化で奥にコア	・二つの参拝室、納骨室が存在 ・お寺の本堂と分離されている
明園寺納骨堂 清浄殿無量光	集中型	・本堂のすぐ隣に位置 ・スロープによりバリアフリーが充実している	・天井の高さは変化が無いが、5mの高さで開放的で明るい

納骨室の配置類型は大きく二つの類型に分けられ、室が複数に分散するものを「分散型」、一つの室にまとまっているものを「集中型」とする。建築面積が小さいほど一つの納骨堂に収め、建築面積が広いほど複数の納骨室に分散させる傾向がある。また、納骨室に向かう際に仏間や、通路をおいて、納骨堂の外と納骨室の内を分け、参拝客の心理に対する配慮をしている。つまり、設計者は納骨室を非日常的な空間として計画している。

4-2 納骨壇の分析

納骨壇の情報は記載されていないものもあったため、写真と図面で確認を行う。一般的にロッカー式が多く、狭い面積で収蔵率を最大に上げられることや、ロッカーの前で参拝を行うことができることで、別の参拝室が必要としないという利点があり、ロッカー式が好まれていると考えられる。また、分散型の納骨堂の場合、参拝客の動線とともに目線も分散させようとしている。さらに快適な参拝が出来るよ

う、納骨壇を詰め込めず、違う活動が行われるような空間を設けている。

表3 各納骨堂の納骨壇の種類と規模

名称	納骨壇の種類	規模
真宗高田派本山 専修寺納骨堂	確認要望	約1万数千基
浄土宗麟鳳山九品寺 山門・納骨堂	木材 棚式	約765基
鎌倉の納骨堂	シナ合板 ロッカー式	約301基
長楽寺納骨堂	木材 ロッカー式	748基
竹林寺納骨堂	スチール製 ロッカー式	約1300基
新宿瑠璃光院白蓮華堂	機械式	3500基
明園寺納骨堂清浄殿 無量光	写真により、仏壇式だと予想	523基

5章 結論

調査対象の納骨堂では収蔵率を上げる設計ではなく、参拝客の心理を配慮した設計を行うことがわかった。それは納骨堂の平面計画だけではなく、納骨壇の置き方や納骨堂までのアプローチなどを考慮することで良い環境で参拝出来るように計画されているからだと考えられる。また、多くの納骨堂が敷地に対して納骨堂という空間を非日常化させ、参拝という行為を日常と離れたものと認識させる意図も見られた。

本研究では納骨堂が会員制により個人情報を扱ったり、申う空間であるため、図面の入手や現地調査が難しかった。そのため今回の調査対象は新建築に記載された作品に限定せざるを得なかった。現代建築の一つとして紹介されたため、宗教の象徴性が薄かったとも言える。しかし調査対象の特徴としては納骨堂を敷地の内外を分けることで参拝の行為に対することや納骨室の空間を非日常化させることが重要であることがわかった。この特徴を地方公共団体や民間法人による納骨堂にも生かすことで人々の生活の中で納骨堂が広がるのではないかと思われる。

【参考文献】

- 『新建築』 新建築社 1999年1月~2016年8月
- 山田明宏、八木澤壯一「納骨堂・墓苑に対するその設計者の意識とデザインモチーフについて」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1999年9月 pp.499-490
- 横田陸、八木澤壯一、吉村彰「首都圏大都市における市営納骨堂について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1989年10月 pp.377-378
- 武田至、積田洋「都内にみる納骨堂の形態と求められる要件について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2009年8月 pp.489-490